

大木塚遺跡調査概報

1985年2月

豊浜町教育委員会



青 磁 碗



白 磁 皿(3枚)

大木塚発掘調査に思う

大木塚はいつごろの時代に築造されたものか。どのような歴史を秘めているのだろうか。

この塚の発掘調査は、関係者を始め多くの町民期待のうちに香川県教育委員会文化行政課技師の指導のもと、一次と二次の2回に分けて前後2か月余をかけて実施されました。

その結果、この塚は13世紀後半頃から14世紀代に築造された可能性が強く、副葬品（墳墓とすれば）と思われる青磁碗、白磁皿などの貴重な出土品を見たことは、すでに多くの町民の知るところであります。この塚は墳墓なのか。墳墓であれば、被葬者の階層は、職業は、生活の様子は、築造に従事した人々は………このような様々な思いが私たちの脳裡をかけめぐり、語りかけているように思われます。また、ここに葬られたであろう人も、この塚の築造に従事したであろう人びとも、それぞれ、この地方の発展と子孫の繁栄を願ったであろうこと、現在町の発展と町民の幸福を願って努力されておられる人びとのことなどを考え合わせるとき、この塚がいっそう身近な存在として感じられ600年前の時代に生きているような錯覚さえ覚えます。科学万能の時代にあっても、なお古い文化を愛し、古い時代を振り返ることの重要さを痛感いたします。

終りになりましたが、この発掘調査のためご尽力くださった方々のご苦労に対し心から感謝申し上げ、今後ともにご指導とご協力をたまわりますようお願い申し上げます。

昭和60年2月1日

豊浜町長 合田増太郎

大木塚の発掘調査に寄せて

豊浜町大字和田の南西部、本村地区と大平木地区の間に広がる田園の中に、ぱつんと一つお椀を伏せたような小さな塚がありました。これが「大木塚」であります。

一見何の変哲もない小さな土饅頭のようなこの塚は、これまであまり世間の関心をひく存在ではなかったようです。けれども、近年文化財愛護思潮の普及に伴い、当町文化財保護協会の人びとは、改めてこの塚に注目し、ぜひこれを発掘調査したいという声が高まってきました。たまたま、この地域一帯が近く農地基盤整備事業の対象になつたことから、これを機会に町教育委員会は大木塚の発掘調査に着手することになりました。

この調査事業は、香川県教育委員会の現地指導のもとに行われましたが、その結果本県下でも珍しい遺跡が発見され、貴重な出土品を採掘することができました。これらに基づいて、大木塚の築造年代は、ほぼ13世紀末から14世紀にわたり、鎌倉時代後半から室町時代にかけて造られたものと推定されています。

このようにして、大木塚は貴重な文化財であることが証明され、予期以上の成果を収めることができたことは、誠によろこばしいことです。

ところで、この塚は一体何であったのかということは、誰しもが抱く疑問であろうかと思われます。発掘の過程においては、いろいろな臆測がなされました。現段階では墓であるという可能性が強くなりましたが。けれどもそれを確かに裏付けるものがないので、これは他の性格をもつ遺跡ではないかという説もあるがち否定はできません。とはいえ、これが誰かの墓だとすれば、被葬者は当時の一般庶民ではなく、少くとも莊園領主以上の階級に属していたものと推定されます。もしそうだとすれば、600年余の遠い昔に思いをはせて、私たちの夢とロマンが大きく広がっていくのを禁じ得ません。

しかし、この塚については、今後の調査研究にまたねばならない問題点がいろいろ残されているようです。

当町には、院内貝塚、台山古墳、獅子鼻城跡、大坪窓跡等その他の遺跡がありますが、今後はこれらの遺跡とともに、大木塚を貴重な文化的遺跡として大切に整備保存し、永く後世に伝えていくよう、全町のみなさまのご協力をお願ひいたします。

なお、最後になりましたが、今回の発掘調査に当り、終始ご熱心にご指導を賜りました県教育委員会文化行政課の安田和文先生並びに他の諸先生方に厚くお礼申し上げます。

昭和60年2月1日

豊浜町教育委員会教育長 薦原壽男

例　　言

1. 本書は、豊浜町大字和田乙1325番地に所在する大木塚の発掘調査概要である。
2. 本調査は、豊浜町教育委員会が主体となり、香川県教育委員会の指導を受け昭和58年度に実施した。
3. 現地調査は、県文化行政課職員が、下記のように指導分担した。

一次調査　主任技師　東原輝明

二次調査　技師　安田和文　(県高松市立古高松中学校教諭)

4. 本書の執筆・編集は安田が行った。
5. 現地調査および報告書作成には次の諸氏から種々の御指導・御教示・御協力を賜った。記して謝意を表したい。

松本豊胤・秋山忠・伊沢肇一・渡部明夫・真鍋昌宏・松野一博・丹羽佑一

豊浜町文化財保護協会会員有志　　豊浜町教育委員会事務局職員　　(順不同)

目　　次

1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過	1
3. 位置と環境	2
4. 調査の概要	4
(1) 盛土について	4
(2) 石積みについて	7
(3) 石積みの構築について	7
(4) 石積み下の遺構について	7
(5) 石積み全体の構築について	8
(6) 石積みと盛土の関係について	8
(7) 遺物について	15
5. おわりに	17

1. 調査に至る経過

昭和58年6月20日付で豊浜町教育委員会から、三豊郡豊浜町大字和田乙1,325番地に所在する通称大木塚に対する遺跡発見届が、香川県教育委員会を通して文化庁に提出された。

大木塚はこれまで遺跡台帳には記載されていなかったために、公けには知られていなかったが、地元豊浜町では「大木塚は古い墓であり、狸が住んで人をたぶらかす」という伝説が残っており、周知の遺跡ではあった。

この大木塚を含めた周辺の農地全体が昭和59年度の農業基盤整備事業の対象になったため、豊浜町はこの塚が果たして遺跡かどうかを確認し、保存か撤去かを判断する資料を得る目的で発掘調査を実施することになった。

豊浜町教育委員会は、県教育委員会の指導を受けて、遺跡発掘届を文化庁に昭和58年6月20日と12月22日付けで2回提出した。そして文化庁から受理の通知を受けたため、発掘調査を実施した。

2. 調査の経過

大木塚の調査は、一次と二次の2回に分けて実施された。一次調査は昭和58年10月20・22・23日の3日間おこなわれた。この調査では塚の盛土を縦横に断つトレングチを設定し、造構の出現を確認するに留めた。この調査により盛土下約1.5mの地点で、川原石・緑泥片岩を配している石敷きを検出した。あわせてこの石敷きの上面より、土鍋の脚・古備前の甕の底部などを発見した。この結果、大木塚は中世に属する遺跡であるという可能性が強まった。しかし、幅1mのトレングチでは全容を把握することが困難であり、さらに調査を進めることになった。

以上の点を踏まえて昭和59年1月9日から二次調査が始まった。以下、調査経過を示す。

- 1月9日 一次調査区の埋め戻し土を再び排除する。
- 11日 県教委文化行政課現地指導を開始する。
- 18日 塚の盛土除去。石敷きを全面検出する。
- 19日 豪雪。当分の間作業休止。
- 26日 石敷きは基壇状に盛り上がっている。
- 27日 石敷き裾部に列石発見。石敷き上面で明代後期と思われる青磁皿を発見。
- 31日 石敷き実測開始。再び豪雪。
- 2月8日 石敷き実測終了。
- 10日 主体部の存在確認。主体部石組み中央部土坑より龍泉窯青磁など出土。
- 13日 主体部南部より焼土と粘土を発見する。
- 24日 石組み主体部精査。
- 3月7日 現場作業終了。

3. 位置と環境

大木塚は、三豊郡豊浜町大字和田乙1,325番地に所在し、豊浜町の中央部に位置する。本塚は現在農地の中にあり、周囲が削平されているため、平坦地の中に盛り上がっているように見える。

地形的には和田浜と呼ばれる海岸地帯から次第に比高を増している微高地の先端に位置し、標高約9mの地盤の上にある。

豊浜町に所在する遺跡としては、本塚から約1kmほど南東に進んだ地域にある院内貝塚・前山古墳・獅子ケ鼻城が知られている。院内貝塚は、縄文時代前期に比定され

(注1) た土器が出土していると伝えられると、正式な発掘調査が実施されていないため詳細は不明である。

前山古墳は丘陵の先端に位置する円墳で、墳丘には葺石が存在し、円筒埴輪片が採用されているといわれている。また獅子ケ鼻城は、大平伊賀守国祐が

(注2) (注3) 築造したといわれ、空掘・土塁が残っているとされている。また町の南部には平安時代の須恵器窯跡とされる大坪窯跡がある。

(注4) 大木塚周辺には、かつて数基の塚が存在していたと伝えられているが、現在残っているのは大木塚のみである。まず大木塚から

(注5) 西へ300mほど進んだ地点に「船岡塚」と呼ばれる土盛りの塚があった。昭和52年頃に農業基盤整備事業により消滅してしまったが、この塚は唐人船が沈没した地点に

その供養をするためにつくられたと言われており、消滅の際船板が塚から出土したと伝えられている。さらにこの船岡塚から北に300m北に向かうと船塚という字名が残っているので、この付近にも塚があったようである。

このように、大木塚のみが現在残っているが、周辺には塚がかつて存在していたことから、他地方の塚の立地と共通している点がある。

(注1) 香川県教育委員会『院内貝塚』

『新編香川遺書考古編』1983

(注2) 豊浜町教委関係者よりの教示

(注3) 『西讃府志』『全漢史』

(注4) 松本豊原ほか『獅子ケ鼻城』

『日本城郭大系15』1980

(注5) 詳細は不明である。

(注6) 『西讃府志』



写真1 図調査区より和田浜を望む



1:25,000

500m 0 500 1000

- 1 大木塚遺跡
- 2 浄福寺跡
- 3 前山古墳
- 4 獅子ヶ鼻城跡
- 5 院内貝塚
- 6 大坪窯跡
- 7 船岡塚跡

第2図 遺跡位置図

4. 調査の概要

大木塚は古墳の可能性もあったため、盛土を墳丘と考えて一次調査を実施した。しかし二次調査の結果、この盛土と後述する基壇状の石積みとは関連する可能性が低くなつた。そこで、本稿では盛土とその下から検出された石積みとをそれぞれ独立した性格を持つ遺跡として記述したい。

(1) 盛土について

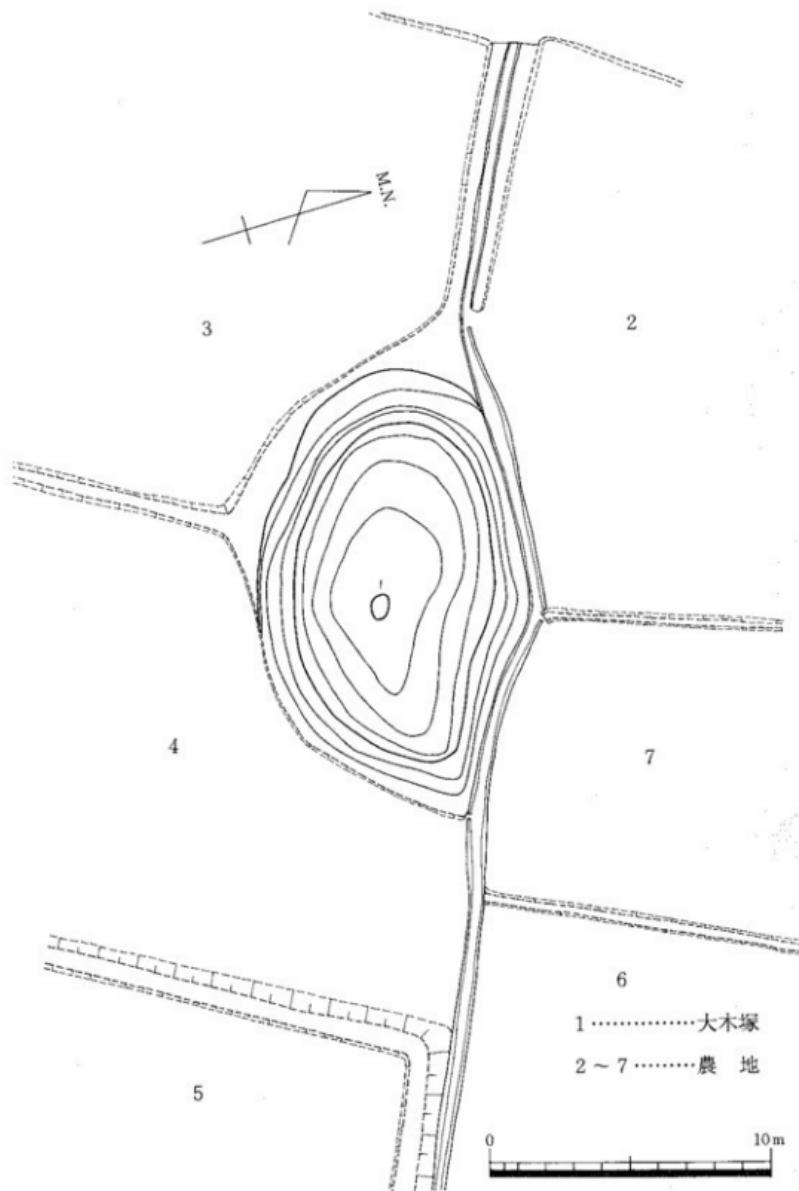
盛土は元来径15m程度の円形をしていたが、周辺の農地により削平が進み、現状では扇形を呈している。長軸15m・短軸10m・高さ2mを計る。

盛土の土層は、大別して4つに分けられた。まず腐植土層が厚さ20から40cmほど堆積している。この層からはビニール袋やビー玉が出土していることから、最近の堆積であるということがわかる。次に礫混りの淡灰黄色の砂質土が50から60cm堆積している。この層からは遺物は出土していない。さらにその下層はやはり礫の混じった黄褐色の砂質土層で、厚さは80から100cmほどである。この層も無遺物である。この第3層の下の層が淡黄色の粘土質の土で、15から20cmの厚さである。この土は石積みの上に堆積していたため、当初石積みを保護するために覆われていたものと考えていたが石積みよりもさらに南に7mほど広がっていることなどから、直接関係ないものと判断した。

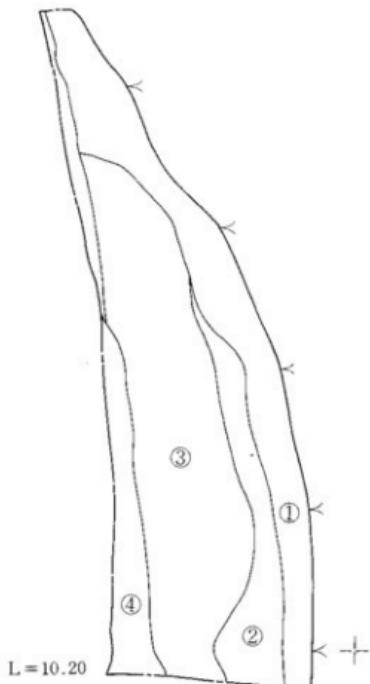
この盛土の時代は、石積み基壇直上から明代後期に比定できる輸入磁器が出土していることから、16世紀以降に築造されて明治初期には既に現出していたと考えられる。



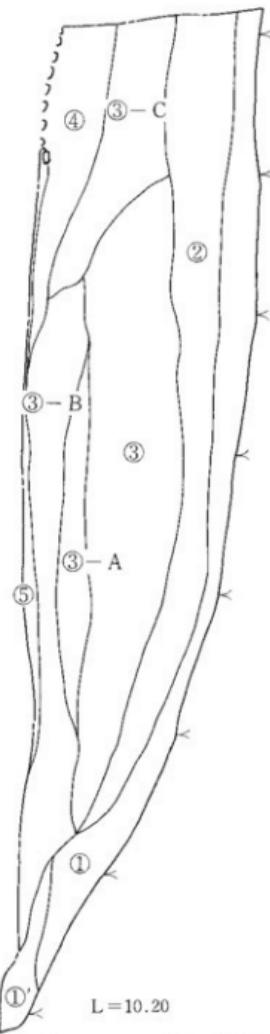
第3図 盛土状況



第4図 地形測量図

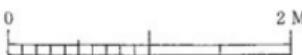


第1トレンチ南壁土層序



第1トレンチ東壁土層序

- ① 黒褐色腐食土層
- ①' 赤黒色腐食土層
- ② 灰褐色砂質土層十礫混り層
- ③ 黄褐色粘性土層
- ③-A 汚黄褐色粘性土層
- ③-B 黄褐色に灰色の斑点の入る粘性土層
- ③-C 黄濃褐色粘性土層
- ④ 明黄褐色+灰色の斑点層の粘性土
(やや③より妙っぽい)
- ⑤ 黑褐色土層



第5図 土層実測図

(2) 石積みについて

盛土を除去した後、基壇状の石積みを検出した。この石積みは内法約480cm・外法約540cmの内側を意識して方形に石を配した石列の中に、無雑作に石を積み上げたような状況である。この方形の石列に使用されている石は70~80cm程度の川原石の塊石である。中に積み上げられた石積みの石材は緑泥片岩の扁平な石や川原石で、大きさは緑泥片岩が20~30cm程度で川原石は幼児頭大である。

また基壇状を呈しているため石積みの頂部が一辺約2.5から3mの規模をもつ平坦な方形であり、後述する石組み遺構主体部を発見する手がかりを与えてくれた。この平坦な頂部には緑泥片岩が敷きつめられていた。なおこの石積みの高さは約60cmである。

この石積みの方形を画す外側の石列は南東隅で一部崩れているが、比較的一直線に並んでいる。

さて、この石積みと上にあった盛土との関係であるが、石積みの中心軸が上方の盛土の中心軸より3mほど西にずれており、しかも盛土の下全体に石積みが広がっておらず西に偏在している。

(3) 石積みの構築について

石積みの石を除去していくと、内法約220cm・外法約260cmの方形プランの石組みとそれを囲むような内法約310cm・外法約360cmのやはり方形の石組みを2つ検出した。一部に崩れはみられるものの、内側を意識して石を組んだものと考えられる。石の大きさは30から60cmほどで、石材は川原石である。石を組むのを意図してか、加工の痕跡のある石も見られる。元来は2段積みで高さ30cmほどに揃えていると思われる。また、石と石の間には崩れを防ぐための詰め石が各所に見られる。

この石組みを含めた石積みの構築方法は、まずは3つの方形プランを呈する石組み・石列をつくり、その石の間に川原石や緑泥片岩の扁平な石を無雑作に詰め込み、さらに積み上げる。そして、石積み頂部を平坦にして、緑泥片岩を敷きつめるという順序でつくる方法を採用していると思われる。

ただ、基壇頂部中央から西半分にかけては、石積みが乱れており、後世の意図的な改変を受けて再び改修した可能性がある。

(4) 石積みの遺構について

石積みの下には玉砂利が約10cmの厚さで堆積していた。この玉砂利を除去すると、石組み中央部で土坑1、南部で焼土面を伴う赤く焼けた粘土塊1をそれぞれ検出した

① 土坑について

石組み中央部から土坑を検出した。現状では径約160cm・深さ32cmを計る土坑内には玉砂利・黒褐色砂質土が充満していた。また、この土坑は石組み下に共通して広がる黒褐色土を掘り込んでつくられている。出土した遺物は青磁碗1・白磁皿3以及其他の遺物は出土していない。

この土坑がつくられた時期は、出土した遺物からみて、13世紀後半から14世紀代と考えられる。

また、この土坑の性格は、石積みの中央部につくられていることや青磁碗などを出土していることなどから、石積みの主体部を構成している施設のひとつであると思われる。しかし、墓坑を考えるのは、骨壺や骨片を検出してないために現状では断言できないと思われる。

② 粘土塊について

石組み中央部から南へ約2mはずれた地点で粘土塊を検出した。この粘土塊は石組みの下に敷かれていた厚さ約10cmの玉砂利の層を除去した後に発見された。この粘土塊の周囲には赤く焼けた土が厚さ3cm前後で堆積しており、現状では長さ約200cm・幅70cmを計る。粘土塊周辺からは多数の炭片と赤く焼けた拳大の石を約10個検出した。粘土塊は黄褐色を呈し、その縁辺部は焼けて固くしまっていた。そして、元来はしっかりとした構造を持っていたと思われるが、現在はほとんど破壊され、浮いた状態で検出され、わずかに北の一部が残っているのみであった。

構造は、破壊が著しいため全く不明と言わざるを得ない。ただ北の一部が残っていたために、この断面を観察することにより以下の結果を得た。まず、前述した土坑と同じように黒褐色土を掘り込み法面をつける。その法面に粘土を張りつけるという構造である。しかし焼けた石の役割・覆屋などの上部施設の有無・粘土塊の全体構造などについては、全く不明であり、今後各地の調査事例に待つほかはない。

さて、この粘土土坑築造の時期であるが、黒褐色土を掘り込んでいることから、前述の土坑と同一の時期と考えたい。また、この粘土塊の上面から底部糸切りの土師質土器小皿が7個体分ほど出土しており、この糸切りの小皿の時代を今後より明確に比定できるようになれば、より時代を明確に確定できるであろう。

性格については、石積みにともなうもの、火を使用して何かを燃やしていることの2点のみが判明しているが、かまどであるかどうかは不明である。

(5) 石積み全体の構築について

まず地山面に20~30cmほどの厚さで堆積した黒褐色土を掘り込んで粘土塊と土坑がつくられる。さらに、その上に玉砂利を厚さ10~30cmほど敷いたりして平坦面をつくる。そして、(3)で述べたような構築方法で石積みを築く。

(6) 石積みと盛土の関係について

石積みと盛土は以下述べる理由により無関係であることが判明した。

① 石積み上面で出土した青磁皿は明代後期、すなわち16世紀代の遺物と比定できこの上に堆積した盛土は16世紀以降に築かれた可能性が強い。一方石積みは、土坑内より出土した青磁碗より13世紀後半から14世紀代に比定でき、両者の間には時期差が著しい。

② 盛土の中心軸が石積みの中心軸と著しくずれており、しかも、石積みは盛土下の西に偏在しており、東には何の遺構もなかった。



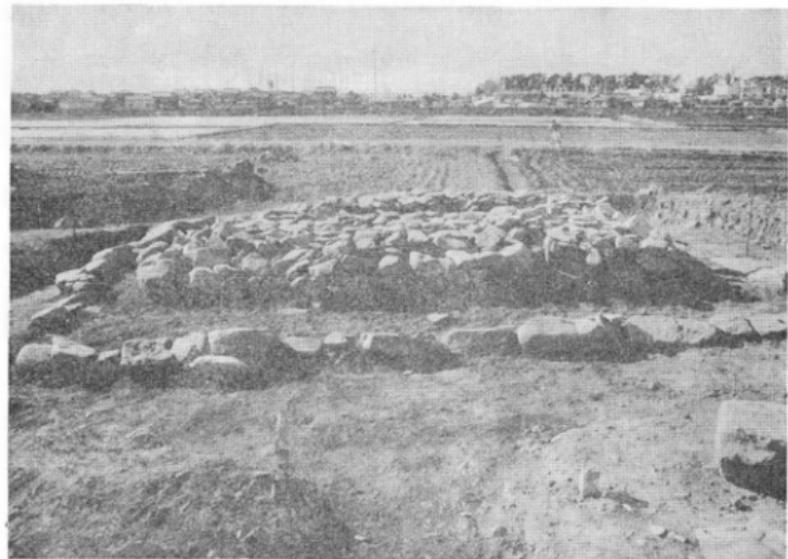
第6図 石組み平面・断面実測図(I)

⑧ 盛土の上面に在った五輪塔の火輪は花崗岩の石材である。しかも、軒の反りは大きい。一方石積み上面で発見された五輪塔の火輪は凝灰岩であり、反りは小さい。したがって、異なる時期の五輪塔の可能性が強い。

以上の3点を考慮して、盛土は石積み構築後、数世紀を経てから盛られたものと思われる。



第7図 石積み（南から）



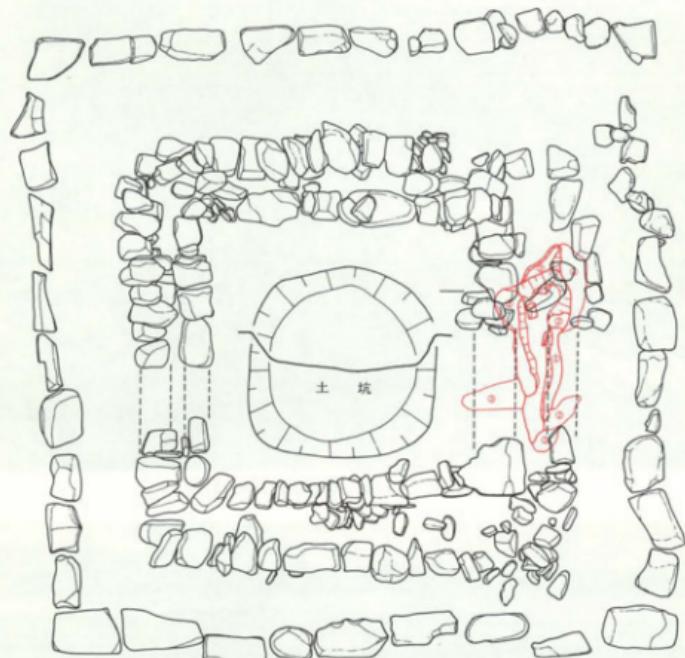
第8図 石積み（東から）



第9図 石積縁辺部



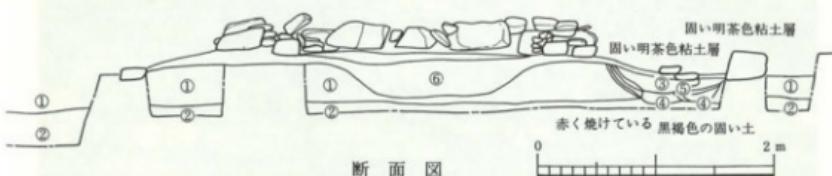
第10図 石積縁辺部



燒土塊の広がり
 ①やや固い燒土
 ②圓い明茶色粘土層
 ③燒土(やわらかい)

- ①黒褐色土層(カタイ)
- ②明灰茶色土層(カタイがハサハサしている)
- ③汚灰黒褐色土層(やわらかくハサハサしている)
- ④汚赤色土層(きたなく動いた土と思われる)
- ⑤赤色に変化した土(やわらかい)
- ⑥玉砂利

平面図



第11図 石組み平面・断面実測図(II)



第12図 石積み全景図（南より）



第13図 石積み全景図（東より）



第14図 主体部（土坑）



第15図 主体部（粘土塊）

(7) 遺物について

遺物は盛土の腐植土層・石積み上面・石組下の土坑および粘土塊・黒褐色土層より出土している。

① 土師質土器(第16図)

全て粘土塊の上面より出土している。1～4までは小皿である。1は口径7cm・器高1.4cmを計る。内外面は明るい茶褐色である。底部は回転糸切り底で、ロクロ回転は左回転である。口縁端部は尖っており、口縁は外反して立ち上がっている。整形は回転ナデである。2～4も1と同様な手法で製作されている。4のロクロ回転方向が右である以外は左回転である。5は杯である。口径は10.1cm・器高3.3cmの法量をもつ。体部はゆるやかに外反し、口縁端部は丸く収る。内外面ともに明るい茶褐色であり、胎土に1mm前後の砂粒を含む。ロクロ回転は不明。底部に糸切り痕を残す、体部内外面とも回転ナデ。6・7は底部のみ出土で、器種は不明である。外部に糸切り痕を残し、内面はナデである。

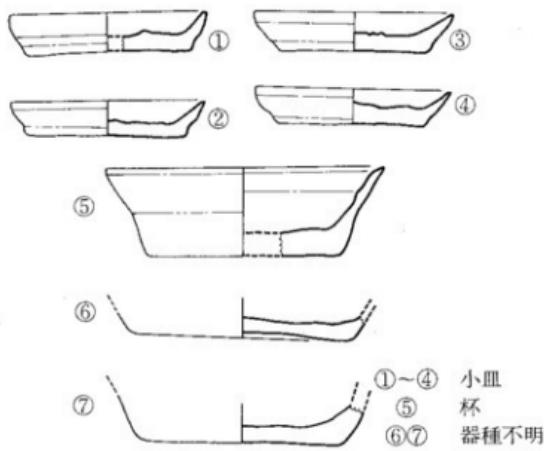
② 輸入磁器(第17図)

白磁皿(1～3) 石組み中央の土坑から出土した。3の口縁部が僅かに欠失しているが、他の2つは完形品である。いずれも口禿げと呼ばれる。1は口径10.8cm・器高3.2cmで、体部下半に稜線を有している。素地は灰白色で底部内外面に至るまで、淡白色の釉を施している。見込みの部分には沈線がある底部はヘラ切りと思われる痕跡を残している。2は口径11.1cm・器高3.4cm、3は口径10.8cm・器高3.0であり、製作技法、形態は1と同じである。3は貫入が著しい。

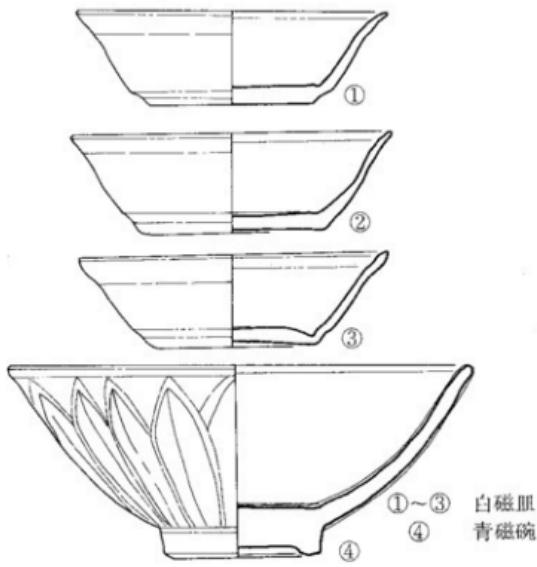
青磁碗(4) 白磁皿と同じ土坑より出土した。口径16.2cm・器高6.2cmを計る。口縁部を僅かに欠失している。胎土は乳白色で釉は不透明のにぶい灰色をふくんだ薄緑色である。内外面に僅かに貫入がみられる。片切彫と呼ばれる手法によって蓮弁をつくっている。蓮弁の稜線はにぶいが、中心を通っている。疊付・底部とともに露胎している。高台高は1cmであり、全体から受ける印象は、どっしりして重厚さに満ちている口縁端部はやや外反している。高台は削り出しによってつくられている。龍泉窯系と思われる。

青磁皿(5) 石積み上面より検出した。口径14cm・器高1.9cmを計る。底部内外面疊付とともに薄青色の釉がかけられている。体部は中ばで大きく外反し立ち上がっている。断面はシャープな印象を受ける。釉は見込みの中で幅3cmの同心円状に削られている。また、体部下半には釉がかけられていない。時期については、まだこの種の磁器については研究が進んでいないが、16世紀代としておきたい。

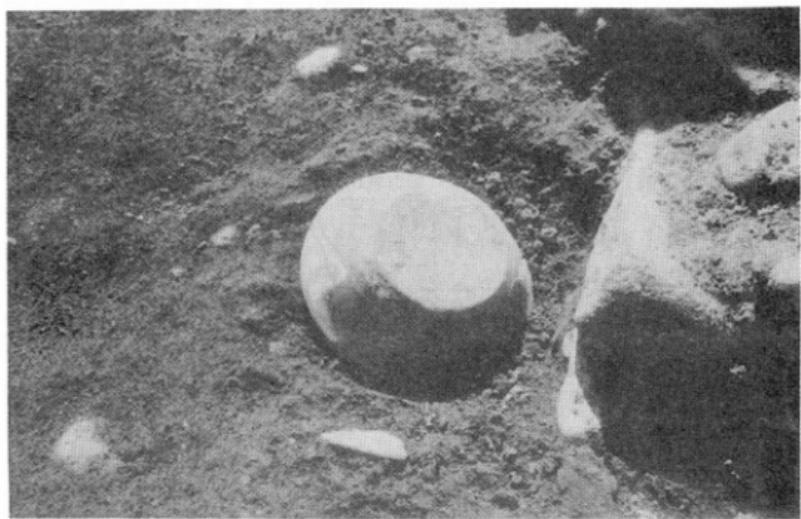
(注1) 渡部明夫氏の実見・教示による



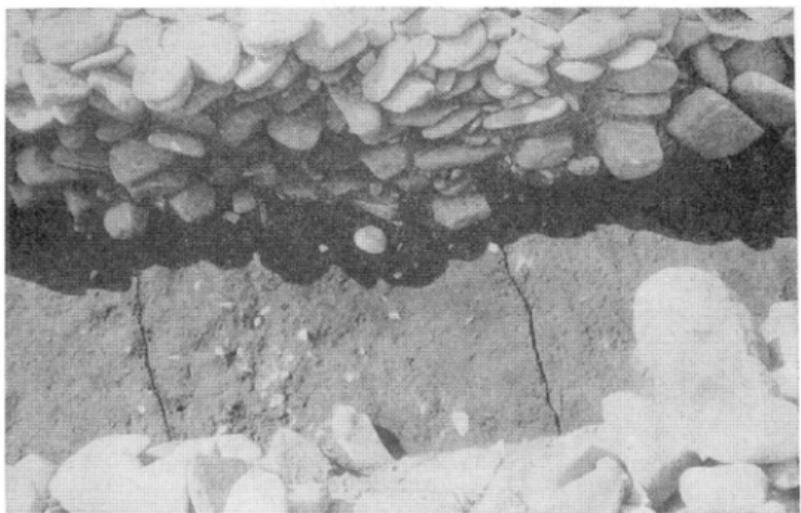
第16図 土師質土器実測図 (1/2)



第17図 輸入磁器実測図 (1/2)



第18図 遺物出土状況(I)



第19図 遺物出土状況(II)

おわりに

大木塚は、調査の概要で示したような多大な成果を挙げることができた。以下調査結果を列挙する。

1. 本塚の石積みは、13世紀後半から14世紀代にかけて築造され、さらに16世紀以降の盛土によって現在の形状を示すようになったと思われる。
2. 基壇の形態を示す石積みの類似例としては、広島県草戸千軒遺跡・熊本県蓮花寺跡などが挙げられる。⁽¹⁾ 本県では最初の発掘例であり、保存状態は非常に良好である。⁽²⁾
3. 石積みの下から出た方形プランの石組みの類似例は、坂出市轟石島大浦浜遺跡⁽³⁾で検出されている。しかし完全な形で検出できたのは、最初であり、規模の大きさからみても希有のものである。
4. この塚から出土した遺物のうち、青磁碗は13世紀後半に比定できる龍泉窯系の碗と思われ、口縁の一部が欠失しているものの、ほぼ完形品のまま出土したのは、本県⁽⁵⁾では貴重な例となっている。
5. この塚の性格は、墓など仏教に関連する遺跡であろう。ただ、骨片・骨壺を検出していないので墓と確定するには、さらに検証を加えなければならない。
6. 玉砂利下の粘土塊については不明な点が多い。各地の調査事例の増加を待ちたい。

このように大木塚の発掘は、非常に意義深い資料や課題を我々に提供してくれた。中世遺跡の調査例が少ない三豊地方の研究への一助となれば誠に幸いである。

なお、大木塚は発掘調査後、豊浜町教育委員会により、保存整備されることになり学校教育における歴史・郷土学習の教材や社会教育の場として利用される予定である。

(1) 広島県教育委員会「草戸千軒町遺跡」1880

(2) 熊本県教育委員会「蓮花寺跡・相良頬景館跡」

「熊本県文化財調査報告第22集」昭和52年

(3) 仲南町教育委員会「尾ノ背寺跡発掘調査概要(1)」1980

(4) 番川県教育委員会「大浦浜遺跡」「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概要(VI)」1983

(5) 渡部明夫氏の実見・御教示による

大木塚遺跡調査概報

昭和60年2月20日発行

編集・発行 豊浜町教育委員会

三豊郡豊浜町大字和田浜1531の1

印刷所 石川印刷興業株式会社

